



景 全 の 泉 温 蟲 淺

淺蟲温泉と附近の名勝

農商務省屬託

和 田 干 藏

淺蟲温泉場は青森市の東方三里の地點にあり、上野驛を距る四百四十七哩二十七鎖なれども、青森驛より九哩五鎖なるを以てこの地より日歸りに清遊を試むべき里程に過ぎず、同所は春花秋紅夏月冬雪四季其の特色の美景を恣まゝにして、東西南の三方に緑山を負ひ前方に滄海を抱き、諸所に温泉洗然として湧出し、佳景を以て轟き靈泉を以て名あり、加之近時は東北帝國大學臨海實驗所及び温泉熱を利用せる縣立の温室等設置せられたるがため、一躍科學的遊覽地となるに至れり、されば四時夫々の觀客雜踏し極めて繁華を呈するに至れり、將來益々發達の域に達せむとす。

淺蟲温泉場の濫觴及び沿革は詳かにすると能はざるも、里人の言傳によれば、昔時圓光大師東國に巡錫して偶々此の地に來りしに、一頭の牡鹿蒸氣沸々として騰り居る温泉中に浴せるを發見し、四五日にして其の行く所を知らざりしを以て、初めて靈泉の効驗あるを知り、郷民を諭して浴場を同地に開設せしめたり、是即ち當温泉の濫觴なれども、土人恐れて浴するものなく、唯布を織るべき麻を温泉に浸して蒸すのみなりしが、之より麻蒸の湯と呼ぶに至り、中古更に淺蟲の湯と訛稱するに至り、後遂に淺蟲と改稱せられたりと云ふ。

泉源は數個所にして、村の中央を流る、宇多宇川（鳥頭）附近に有名なるもの多く、椿の湯（溫度華氏百六十三度）大湯（百六十七度）大湧の湯（百五十八度）五郎手の湯（百七十度）裸の湯（百六十度）柳の湯（百三十四度）目の湯（百六十八度）鶴の湯（百五十六度）等之にして、何れも鹽類泉に屬せり、各温泉の特質は多少の差異あれども便宜上大湯の分析表及び泉質を示さむとす。

本泉は無色透明無味無臭にして中性の反應を呈し、一リットル（約五合五勺）中に含有する各成分量は左表の如し。

成分	含有量	成分	含有量
固形分	一、一七八五	鹽化曹達	〇、二二一三
鹽化加里	〇、〇〇三一	硫酸曹達	〇、一九七四
硫酸加里	〇、五一五〇	硫酸苦土	〇、〇〇三九
硅酸	〇、〇五五〇	酸化鐵	〇、〇〇一六
計	一、〇八六八		

淺蟲温泉の主治効能は相通して各種痲痺、痲實斯、慢性痛風、諸痲衝、創傷後の滲出物、肥厚、神經進亢の諸症、慢性胃腸加答兒、痔疾、婦人生殖器の慢性諸病、慢性梅毒等に有効なり。

淺蟲温泉場は交通便にして急行列車も停車し、青森との間には定期自動車の設備あり、又遊覽者のためには特に遊覽船及び水族館まで自動車を出す等夫々の便宜あり、温泉旅館の主なるものは東奥館、椿館、丸山館、南部館、仙波館等にして其の他多數の温泉客舎ありて愉快に湯治を試み得べし。

近海の遊覽所

淺蟲温泉場近海には湯の島、二子島及び裸島等各絶景に富める奇島あり。

湯の島は温泉直前に見ゆる島にして、海上十町の地點にあり、湯も無きに湯の島とは零陵の石燕飛ぶの類にて有名無實の如く考ふる人あるも、辨天堂附近の海底には熱湯の湧出する處あるを以て湯の島と名稱せるものなり、湯の島は福壽草 (*Adonis amurensis*) の自生地にして青森縣中にては他より約一ヶ月位早く、黄艶馥郁として新春を告ぐるが故に又福壽草島と稱す、而して其の東南面は樹林鬱蒼として雜木繁茂し、其の間に辨天堂と名づくる一古堂あり、又其の西北部即ち島の背面は懸崖絶壁にして輝石安山岩 (*Pyroxene Andesite*) の柱狀節理 (Co-

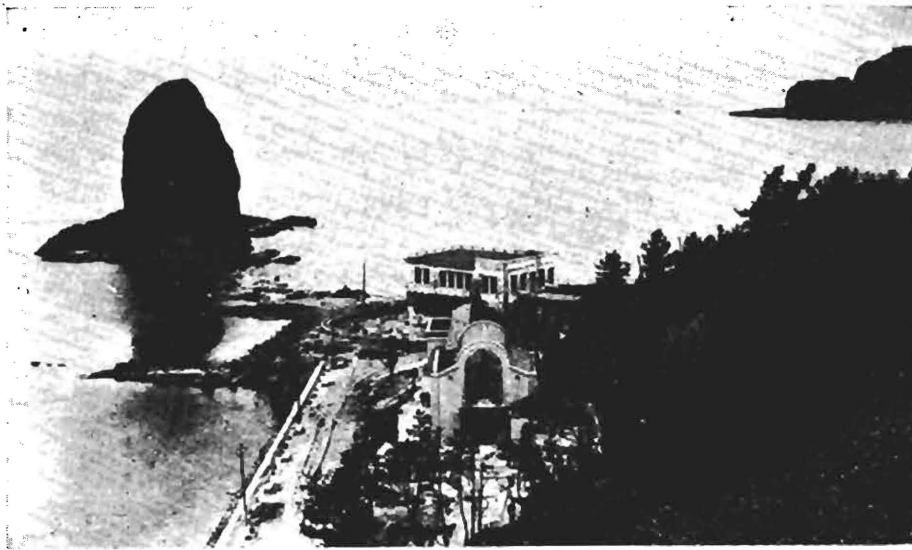


海に面する立岩の裸島

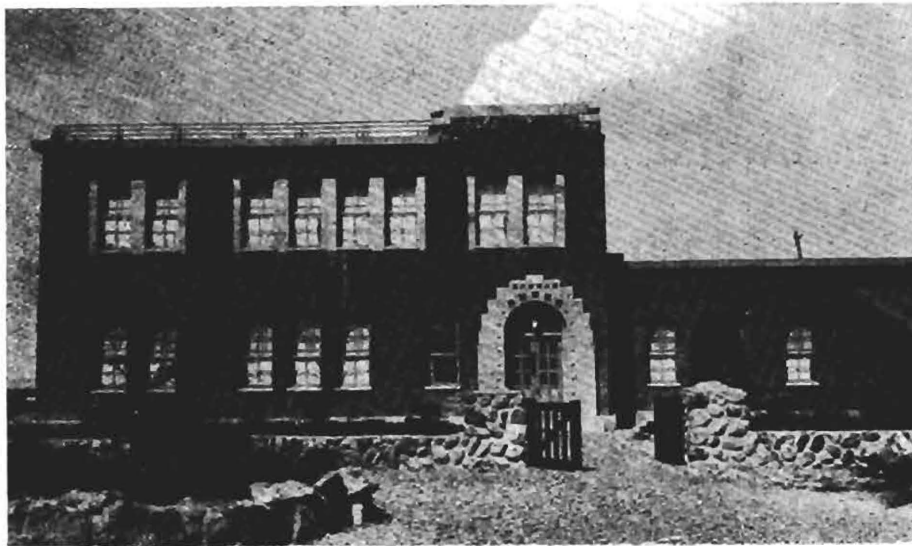
東北帝國大學臨海實驗所

lunar joint) は恰も木材を疊載せるが如く配置し材木岩の名あり、此の外島帽子岩、モリラギ石等の奇岩ありて水際四方より來集し、島上に宿りて一日の羽勞を慰するため、岩面よく白糞に染められ、岩の裂隙には夏月イソヒヨドリ *Monticola solitaria magna*) キセキレイ (*Catalpa cinereus melanope*) 等營巢し、又外ヶ濱銘禽ウトウ (*Certhia mono cerata*) の憩息場たり、舟を賃して往かば僅か十五分内外にして到達すべく夏月旗亭又出張店を出せり。

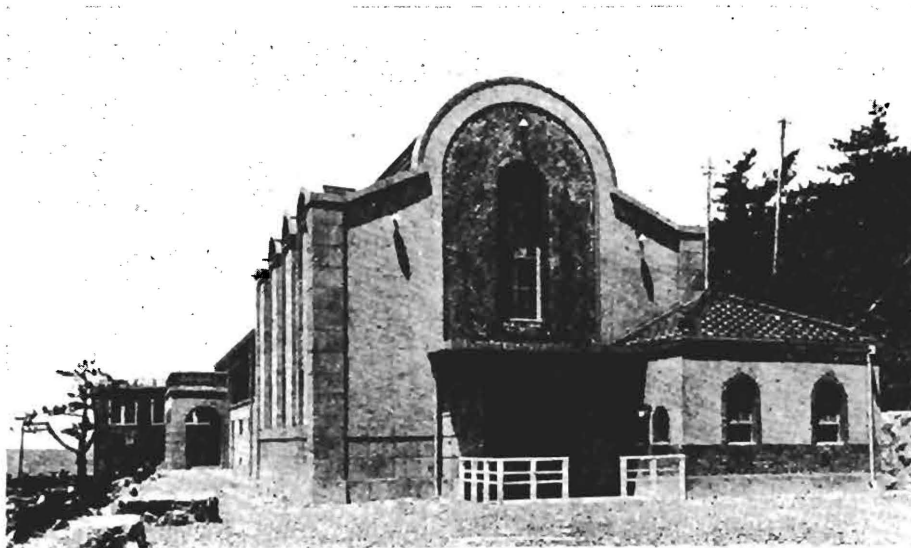
裸島は海上北十三町の地點にあり、名の如く裸岩にて白根崎の頭前に孤立せり、同島は陸上より舟なくして歩渉し得べしと雖も、島體には上陸すること不可能なり、此の島に關する傳説は里人に據れば昔此の村の小兒海濱に遊び居たりしに、大鷲飛來して島上に凌ひ往きたるを以て、其の母狂氣の如く追跡して島に攀登り、鷲を追うて小兒を救ひたれども絶壁にして下る能はず、村人これを救はむと欲したれども術なく、唯島下に群集して共々その名を呼ぶのみ、母子遂に島上に餓死せしと云ふ、今尙島體諸所の岩上に爪跡の如きも



景 全 の 所 海 臨 學 大 國 帝 北 東



館 本 所 驗 實 海 臨 學 大 國 帝 北 東



館 族 水 閣 附 所 驗 實 海 臨 學 大 國 帝 北 東

のあるは即ち此の際に登りたるものなりと云ふ、裸島は接近するより遠望の景美にして、今は臨海實驗所の背景となり一入好美の風光を映するに至れり。

二子島フタゴジマは海上二里の地點にある奇島にして、天候により種々其の形狀を異にす、或は帆船の如く或は大島となり或は小形となるを以て化島と稱するも敢て過言にあらざるべし、島中は絶景に富み鷲ヶ鼻、鏡岩、二階堂等の奇岩頗る多し。

臨 海 實 驗 所

臨海實驗所 (Marine Biolo. Stcal Station) は東北帝國大學理學部の所屬にして、大正十三年七月開所せるものなるが、其の位置淺蟲驛より北十二町を距りたる海濱の一角に聳立し、風光雄大閑靜にして研究者の生活には頗る恰適せり、建物は現在廣大とは稱し得ざれども、赤煉瓦の洋館にして實驗室の本館及び水族館、海底實驗室等より成り、尙之に附隨せる教官の官舎學生の寄宿舎等を

も直背部の林地に設けられ、附近の丘上より見下す時はさながら一小都市の感を呈す。

淺蟲臨海實驗所は動物生理學上の研究を主眼とする所にして、斯界の權威者米國ベシシルバニヤ大學教授畑井新喜司氏を招聘して茲に新生面を開くに至りしものなり、されば同實驗所は東京帝國大學の三浦三崎京都帝國大學の熊野灘實驗所等とは大に其の趣を異にせり、即ち外觀に於ては第一海底實驗室並に海中水槽等特殊の設備をなせること、第二鐵道より近き便利なる土地を卜した

ること。

第三教官の官舎學生の寄宿舎等を建設し家族同伴にて後顧の憂なく研究し得る等の點なれども、其の内容に於ても全く世界的の研究を行ひ日本動物生理學の學府を構成し得ること

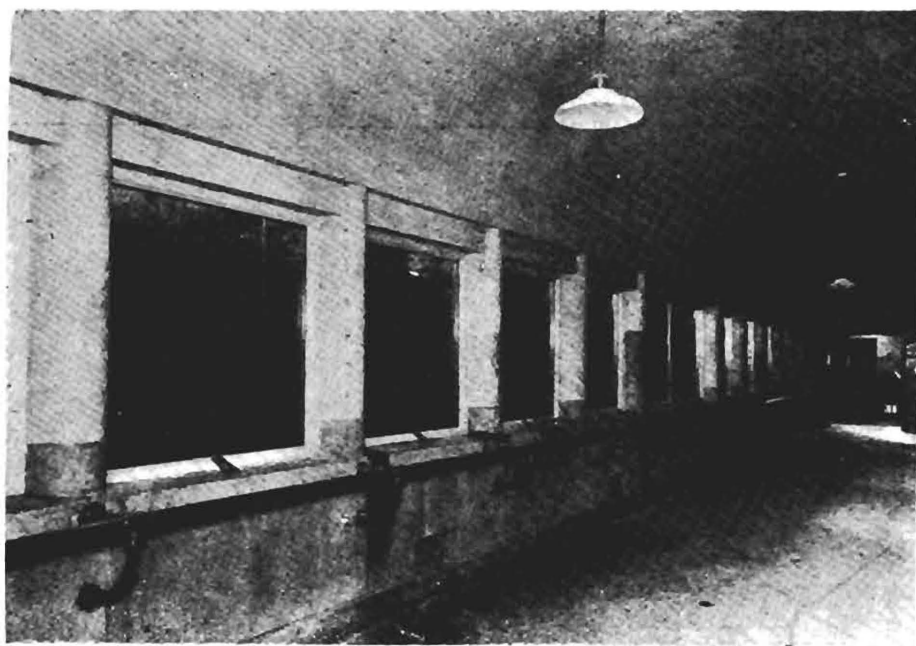
是なり、

畑井所長は從來顧みられざる下等動物の生理學に幾多の問題を捉へ、先づ之を自身にて専心に研究し學生にも指導し前人未發の域に進入するに至れり、元來下等動物の生理研究の材料としては其の數多く何時にても採集し得べく且長生するものを必要とすれども、幸ひ近海茂浦の砂濱一帯に栖息する一種のナマコ即ち *Caulina* (方言ドヂグヂ實驗所名シロナマコ) は全く此の條件を具備せる外に、一般下等動物に少なき體腔液割合に多く人類血液の如き赤血を有し、同列の動物に珍しき大なる赤血球



水 族 館 の 内 部 一 部 入 口 附 邊

を多量に有することは、早くも畑井所長の着眼する處となりしが、無限に研究資料を提供せらるる點より、學生は勿論教官連も他より來る研究者も、何れも趣味を以て之が研究に没頭せり、されば同實驗所に於ける最初の實驗は全くシロナマコを材料とせるものと言ふも敢て過言にあらざるべし、即ち該動物に就き體腔液の化學的研究を行ひたるものあり、又呼吸作用筋肉の運動及び神經生理、血液の化學的研究或は腸の運動等を研究する者等ありて、幾千のシロナマコを犠牲に供したり、また淺蟲近



水 族 館 の 内 部 一 部 魚 の ぞ き

海底實驗室竝に實驗室は一般人の觀覽を許せず殊に前者に於ては一層嚴禁し居れり。
水族館は實に見事なるものにして館内に數室を仕切りて各海底の自然景を模造し、種々なる海魚及び諸種の海産動物を放養し、給水は常に交代し得る様高所に海水を動力にて汲み上げ置き、此所より流し込む装置をなせり、されば直觀して彼等の生活狀況を會得し、其の寄觀は小兒と雖も嬉ぶ所なり。

海には浮遊生物(Plankton)の種類多く、外洋性のものと沿岸性のものとあるが故に、此れが研究も又趣味ありとす、又海底實驗室は全く同實驗所の特設にして永遠の目的を以て動物進化の経路を考證する所にして、少くとも今後一百年位を経過せざれば其の目的を達し得ざるものなるべしと聞く